

ジンバブエの風

発行者のジンバブエ野球会は、1998年4月にジンバブエ初の野球場「ハラレドリームパーク」を作ったジンバブエFOD委員会を引き継ぎ、アフリカの野球振興と野球交流をゆったりと支援する会です。

ジンバブエ野球会は本年5月末で、満20年になりました。10月にタンザニアツアーを計画しています。ツアー参加に関心をお持ちの方はメールか電話で事務局伊藤までご連絡下さい。詳細は申し出て下さった方と個別連絡で進めますのでそれからお決め下さい。又、ホームページを一新しました。両件とも事務局だよりをご参照下さい。

26年前のアフリカ（ジンバブエ）を想う

村井洋介

ドリームパークオープンから20年…時の経つのは早いものです。そこで私も今一度26年前のアフリカと当時の自分に思いを馳せて見ようと思います。

1992年7月、灼熱の大地を想像してジンバブエの首都ハラレの空港に降り立った私の第一印象は、「寒い…」であったことを今も鮮明に覚えている。恥ずかしながらアフリカ大陸の大きさとハラレがある場所の海拔のことなどが全く頭になかった結果である。「アフリカ＝暑い」は当てはまらないのだ。

当時の青年海外協力隊ジンバブエ隊員の現地赴任は英国航空のビジネスクラスでロンドン経由（ロンドン1泊）でのジンバブエ入りというとても豪華なものでした。

92年のハラレ空港は、現在のターミナルビルではなく建て替え前の古いターミナルビルで内装は木がふんだんに使われていたのが印象深い。先進国の空港の様にターミナルビルから直接飛行機に繋がるアームを通して空港内に入るというスタイルではなく、タラップを使って地面に降りてターミナルビルまで歩くというものでした。

そのあと裁判官が座っているような感じの囲いがついて一段高くなっている木製デスクの入国審査場を通過する。

そして、ターンテーブルから無事出てきた荷物を受け取り税関へ…公用旅券の協力隊隊員は多くの現地人や外国人が足止めされている税関も止められることなくすんなり入国できたと記憶している。

空港ターミナルビルを出るとジンバブエ国旗のはためく国旗掲揚ポールの後ろに大きな空が広がっていた。これまた想像していたほどの「青空」ではないものの空が見える範囲はとても広い。

いよいよ空港からハラレ市内に向かうのだが、ジンバブエの国名「石造りの家」の由来となった巨石の転がる乾いたサバンナの中の舗装道路を進んで行く。これもまた想像していたどこまでも真っ直ぐ続く…道ではない。

街に近づくにつれ、塀の外にブーゲンビリアが咲くミドルクラス階級の住宅街やゴルフ場が現れる。(鉢植えのブーゲンビリアしか見たことのない私は3mはあるそれがブーゲンビリアだと知ったのは随分後のことであった。)それらの家を囲む塀の上部には尖ったガラスが埋

め込まれていたり、有刺鉄線が張り巡らされていた。

空港を出てしばらく走ると最初の信号が現れ徐々にハラレ市街地に入っていく、すると私の予想をはるかに超える街並みが姿を現した。近代的な高層ビルと旧英国植民地時代の建築様式の建物が調和した街並みはとても綺麗で品がある。

そのハラレ市街中心部でひと際目を引いたのが当時日本大使館が入っていた青いガラス張りの高層ビル「カリガモンベセンタービル」とその斜向かいにある曲線の美しいモノマタパホテルであった。ちなみにモノマタパとは15世紀～16世紀に南部アフリカに栄えた王国の名である。

モノマタパホテルの後ろには美しいハラレガーデン(公園)が広がり、公園内には10mの飛び込み台がそびえ、プールには満々と水を蓄えた立派な市営プール、芝生のボーリング場(日本の10ピンボーリングとは違います)、公園の脇には洒落た映画館。

そう、暗黒大陸アフリカにある未知の街ハラレは、想像とは全く違う美しく解放感の漂う、道行く人々は華やかで活気に溢れる街でした。

赴任後の現地研修を終えて、隊員仲間がそれぞれの任地へ向かう。幸運にも私の任地はその華やかで活気に溢れ、生活には全く不自由の無さそうなハラレである。

しかし私の配属先であるジンバブエ野球ソフトボール協会は住居の用意はしてくれなかったもので、自分で部屋探しをしなければならぬ。まだ「ネットで検索」などない当時は、JICA現地事務所で働く現地スタッフの話などを参考にハラレの街を歩いて調査、そしてなんとなくセキュリティ面で最も安全そうに思えたアメリカ大使館の近所にあるフラットに決めた。そのフラットは、青年海外協力隊隊員が暮らす場所のイメージとはかけ離れた、電気、水道、水洗トイレに温水シャワー&風呂完備…旧宗主国に感謝である。ただ、バグラーバーという扉や窓の防犯用檻は初めて見る。そして鍵が恐ろしいほど沢山あることに驚き、鍵の開け閉めやその鍵束の持ち運びに辟易したことを思い出す。

私の最初のフラットの場所はジャカランダの並木通りで有名なジョシア・チナマノアベニューと火炎樹並木のレオポルド・タカウィラストリートの交わる角にあるレンブラントコートというフラットで、その周辺は大変美しく、これぞハラレのストリートレジデンスという場所に位置していた。スーパーマーケット、病院、レストランも徒歩圏内にある。

さていよいよ野球コーチとしての活動についてといきたいところですが、野球以外の当時の思い出をいくつか…

まずは野球を教えに行っていたハイデンシティの学校までの乗り物…

基本はバスである。目的地行きのバス乗り場はハラレガーデンから南に下ったところにあるバスターミナル。とてもじゃないが、現地カウンターパートが居なければ、どのバスに乗るのかもわからない状況。で、乗ったバスはある程度満員になるまで出発しないのである。帰りはハラレ市街地に戻るバスがなかなか満員にならないので、毎日毎日凄く待たされた記憶がある。

そしてもう一つの移動手段が乗合タクシー、通称ET(エマージェンシータクシー)、これも当時は数が少なく、またどこでどれに乗れば良いかが非常に難しかった。特にハイデンシティエリア側から街へ戻るための乗り場は行き先が多く複雑であったと記憶している。

車のタイプも92年当時はまだワンボックスカータイプのETは少なく、プジョーのバンタイプが主流で、椅子のない荷台に体操座りで乗る。これが結構辛い、更に野球道具を持っていると疎まれている感が凄かった。

日中、喉が乾けばジュースを買います。当時ハイデンシティエリアではまだミネラルウォーターを売っているキヨスクは少なかったと思います。なので飲み物はジュース。ではそのジュースの買い方について…

当時ジュースといえば瓶入りジュースが主流である。そして瓶ジュースを買うには、引き換え用の空き瓶が必要で、多くのお店(キヨスク)が空き瓶を持っていないとジュースを売ってくれませんでしたから、瓶を持ち歩くのは必須でした。

瓶がなければ喉を潤すセカンドチョイスはフリージットというビニールに入った怪しい色の甘い液体を凍らせたものか、サトウキビになります。

また、小腹が空いたらマプティというトウモロコシを膨らませたお菓子、味なし焼きトウモロコシ、茹でたピーナッツやニモ(豆?芋?)といったところが定番。

食事はもちろんサザ・ネ・ムリオ(ほうれん草に似た葉っぱ、英語名はなぜかただベジタブル)…ニヤマ(牛肉)は高級なので、よく見かけたおかずは内臓系やチキン。私がよく食べたのはサザ・ネ・フク(チキン)でした。肉系おかずの味付けはトマト&オニオンベース、ムリオの味付けの方は色々あって、油のみのもやトマトベースも、美味しいのはピーナッツバター和え。あと個人的には季節もののかぼちゃの葉っぱのピーナッツバター和えが好きでした。その他では、ポロニーソーセージのサンドウィッチ。ポロニーソーセージとはポローニャソーセージのことだと思うが、本物のポローニャソーセージとは程遠いとっても怪しいピンク色で身体に悪そうなソーセージのサンドウィッチでした。

嗚呼、懐かしい…今思うと90年代前半は、とても優しい時間が流れていたジンバブエだった…ちょっとセピア色掛かったようなあのグラウンドの光、草、風、砂埃、歓声が蘇る…いつかもう一度あの場所を訪れてみたい。

TIME IS FLYING

2017-1 青年海外協力隊 ジンバブエ 野球隊員 谷山直規

ジンバブエで野球の普及活動をしております谷山です。ジンバブエは南半球にあるため日本と気候が逆です。ですから現在、冬のジンバブエです。アフリカって寒い?なんて思っていました。想像を超える寒さで驚いているところです。しかしながら、野球のオフシーズンはありません。

さて、こちらに来て11ヶ月が経ちました。残す活動期間も1年1ヶ月となり、ようやく生活にも慣れて来ました。来た当初はコミュニケーションを取るのがうまくいかないことや文化・価値観の違い、誰を信じればいいのか、という不安などさまざまな困難がありました。しかしながら、生活していく中でたくさんの”ひと”に助けられ、たくさんの”ひと”から笑顔をもらい毎日が刺激的でだんだんとジンバブエが好きになってきました。今考えればなぜそんなことで悩んでいたのだろうと笑いが出てくるようなこともあります。

活動はと言いますと同僚から指示されて動いていた6ヶ月間とは違い自分で考えて活動を行うことができるようになりました。現在、平日はプライマリースクール5校、セカンダリースクール5校に行き野球の普及活動をしています。また、土曜日には州のチームの指導をしています。プライマリースクールでは、まず野球というスポーツについて紹介から入り、投げる、捕る、打つ、走ることを1つずつルール説明しながら楽しくやっています。1月には日本からの支援でたくさんの野球道具がジンバブエにやってきました。おかげさまで、できることの幅も広がりさらに多くの子供たちにたくさんのことを教えることができます。たくさんの”ひと”のおかげで野球をすることができているということを私自身も忘れず、彼らにも伝えていけたらと思います。

セカンダリースクールでは、プライマリースクールから少しレベルアップして試合のための練習をしています。実際に7月14,15日には全国大会のための予選がブラワヨで行われる

予定です。1年間で大会はこの大会のみのためこの日のために選手たちは頑張ってきたので
すごく楽しみにしています。”勝ち”にこだわってプレーしてほしいなと思います。勝ちから
学ぶことも負けから学ぶこともたくさんあると思います。この試合を通じて、野球の楽しさ
をさらに感じてほしいです。ジンバブエで私が教えた子どもたちが将来仕事として野球を続
ける人はいないかもしれません。それでもなにか野球で学んでほしいと僕は思います。野球
は集団のスポーツであり自分の役割がそれぞれにあると思います。野球を通して多くの人と
関わり人としてお互いに成長していければと思います。

野球の活動以外にも毎日の生活の中で発見がすごくあり刺激的な毎日を送っています。文
化・価値の違いなどたくさん体験して日々成長している気がします。先日、友人の結婚式に
招待されたので行ってきました。友人とは町の露店でお菓子を売っているマダムなのですが、
私が活動に行く際にいつも挨拶を交わしているうちに現地語であるンデベレ語を覚えてく
れるようになり、今ではンデベレ語で会話するぐらいになりました。ジンバブエの母だと思
うぐらい信頼の置ける人となりました。結婚式前日、私に対して、直規！！スポーツウェア
じゃダメだぞ、きちっとスーツで来てね。と言われましたので慣れないスーツをきて会場へ。
なぜか親族席に座らされ、出席者全員に対してマイクで自己紹介。ここぞとばかりにンデベ
レ語を使いました。すると、どかっと会場が拍手の渦に。マダムも満面の笑みそして2人で
サムアップ。村の小さな教会で行われた結婚式は村中の人たちが大勢あつまり踊ったり、歌
ったりみんながハッピーのそんな結婚式だった。そして何より、日本人である私を招待して
くれたことがすごく嬉しく感じた。たくさん温かい人に恵まれすごく充実した日々を送る
ことができます。

最後に、これまで野球を通してたくさん子どもから大人まで関わる事ができています。
野球を指導する立場になり改めて野球っていいスポーツだと感じています。現地の人から悩
まされることもあります、その悩みを他愛もない会話で吹き飛ばしてくれるのも現地の人
であることは間違いありません。

活動期間も折り返し地点に来ていますが、これからもジンバブエでたくさんの人たちと笑
顔あふれる毎日を送り、私なりの風を吹かせていければと思います。

2017年6月1日～2018年5月31日にご入金頂いた下記皆様に感謝します。(敬称略)

青木尚龍 網野勝史・裕美子 吾妻 智 青山学院大学硬式野球部代表河原井正雄 飯尾明郎 以倉 章 井上久雄
石原豊一 石割 徹 池田周弘 伊藤益朗・和子 伊東 敬 伊東 登 伊藤博文 伊藤卓朗 今岡伸宇 印藤勝弘
上野秀国 上田博司 右柳好博 梅崎道夫 宇都宮年夫 植松幸男 江野村和哉 おかやま山陽高校野球部 岡本征夫
岡本峰春 岡田義昭 岡崎誠吾・朝絵 大前健治 尾崎八郎 小澤 託 大阪うつぼロータリークラブ 金丸明美
金織久恵 軽澤政美 片岡成夫 川上貴司 柄谷 桂 加茂周治 木内祥晴 木戸孝太郎・朝子 切貫可一 清須 賢
桑村進次 小寺信吾 五島 浩 近藤高志 小山誠一 児島敏夫 高野崇弘 神戸ポートワイズメンズクラブ
阪本悦治 坂本義徳 澤田玲子 芝川又美 白井 巧 重松るみ ZY会有志 妹尾佳士 高橋恭三 辰己秀盛
谷村友一 高谷晋介 竹下千あき 田邊雅通 田村正志 田居秀雄 高林敏子 丹 龍太郎 蔦 嘉一郎 堤 尚彦
津地 要 津田健史 寺本 徹 東條恵司 時政英之 中田恭二 中長伸一 中山恵三 中川正昭 難波 緑
成川昭治 長沼加代子 永田和恵 奈良田美代子 西口 勲 西村 勇 沼野耕三郎 野下美佳 野橋節子 鉢呂哲也
林 逸子 平岡徹朗 張間広子 廣岡義之 広岡正信 藤野 真 藤井道雄 藤下美穂子 藤本正晴 古谷利明
古川 明 古市滋久 逸見光子 本間美夜子 前島信平 前川裕二 前田京子 前島宗甫 正岡茂明・康子 松本裕一
松田祐太郎 増田史郎・孝子 水島 洋 水江久代 三瀬和義 三田喜英 宮田典計 峯村しげ子 溝畑智子 村上英樹
毛利泰子 森 健彦 森田隆文 森 宏 森 要 森 文彦 山田恒治 山田信雄 山田静夫 山下貴史 山本 肇
山村宜之 矢野昭博 山西清高 谷内貴洋 吉木直也 吉岡 勉 吉田貞比古 義平幾雄 和田有二 和田勝行
和田昭彦 和田芳明 脇村春夫 渡辺 博

タンザニアに来て 1 年

JICA シニア海外協力隊（野球隊員）岩崎広貴

タンザニアに来て 1 年がたちました。普通は過ぎてしまえば早く感じるはずなのですが、結構色々なことがあり、長く感じましたねえ。

まず、この年（67歳）でこんな経験をさせてくれる JICA に感謝です。

1 年間の活動をまとめます。

2017年3月末タンザニアに来て研修後 TaBSA(タンザニア野球・ソフトボール連盟)に配属され、タンザニアナショナルチーム監督就任を要請される。

ちょっとカッコ良いでしょ。ところが、ナショナルチーム存在しない・選手いない・施設設備、野球用具超不足。どないしょう？・・・からのスタートでした。

そこから、タンザニア各地巡回指導・野球普及活動・ナショナルチーム選手選抜という活動が始まり始まりー。(ムワンザ・ムベヤ・キリマンジャロ・ソングア・ドドマ・ザンジバル各地)

各地では、野球教室の開催。対象は14歳から23歳までの男女選手達と Secondary School (日本の高校)の教師達中心。(ボールの代わりにペットボトルのフタ・バットの代わりに棒・バックネット代わりに使い古しの漁獲網等を使用)

ルールを教え、基本練習を行いゲーム形式の実戦練習を行うといった流れです。初心者から経験者まで色々な人達が集まり、大変でしたけれど選手・教師達が一生懸命やってくれるので、やりがいがありました。特に選手達は Secondary School の生徒が中心で、自分が勤めていた尼崎産業高校の選手達に雰囲気（ちょっとやんちゃで陽気、それでいて結構シャイなところ）が似ていて違和感を感じなかったです。尼崎産業高校の選手達をもう少し色黒にしたような選手達ばかりで、可愛いですよ。

そんなこんなで、5月から11月中旬にかけて、延べ12回ぐらい巡回しました。12月初めに開催されたタンザニア甲子園には12チーム(去年は7チーム)が参加し、レベルも去年に比べると数段アップしたと言われました。

実際5月当初から比べると、チーム数・選手数が約2倍弱(特に、女子野球選手が激増)に増加し、自分の目から見てもレベルが上昇したと感じました。

ナショナルチームに選抜した選手達は、今すぐ日本の高校野球地方大会レベルなら十分に通用する実力を付けてきました。

12月中旬に開催された東アフリカ大会(タンザニア・ケニア・ウガンダ)に、5年ぶりに参加し、アフリカ2位のウガンダには0-19と大敗しましたが、ケニアには8-9と善戦しました。相手は社会人チームに対し、こちらは17歳前後の選手達(2020年東京オリンピックを意識し、若い選手をピックアップした)であったことを考えると、上出来だったと言えます。

僕自身、国際大会は初体験で良い勉強になりました。相手の弱点も充分研究出来て、しっかり準備できるので今年の大会が楽しみです。選手達もレベルの高い試合を経験することによって、ずいぶん意識が高くなってきました。

また、11月末に開催されたレディスファースト大会(タンザニアにおける女子陸上選手だけの大会。初めての試みで、ジェンダーを意識した大会。JICAが主催)に女子ソフトボール選手達がデモンストレーションを行ったことも、女子選手の増加につながりました。

年が明けて2018年2月中旬から3月中旬にかけて、福岡教育大野球部短期ボランティア7人と共にダルエスサラーム郊外の小学校4校を巡回し、野球普及活動を行いました。1校につき3,000人以上の生徒がいる学校ばかりで、生徒が湧いて出てくるようで、大変でしたが、

その生徒達の、まあ可愛いこと、可愛いこと。癒されましたねえ。

福岡教育大生の頑張りもあり、大成功だったと思います。

4月以降、新年度に入り、現在は新たに野球未開発地域（アルーシャ・タボラ・ムトワラ）を、巡回指導・普及活動中です。初心者ばかりで大変ですが生徒達が素直で、熱心に取り組んでくれるので楽しいですよ。

以上活動の報告です。

少し、タンザニアの生活について書きます。

僕の住んでるダルエスサラームは、大都会で大阪の天王寺と神戸を足したような街です。経済も発達している代わりに貧富の差も大きいように思えます。

一方、地方へ行くと農耕中心で経済が、そんなに発達しているようには思えません。しかし、田舎へ行けば行くほど、子供達が多く、僕達が子供の頃の日本に似ています。

人々はおおらかで、親切な人達が多く、どちらが幸せなのか考えさせられます。

何よりも、頭の上に重そうな荷物を乗せ、背中に子供をしっかりとおんぶし、一面茶色の大地を、悠然と歩く女性の姿を見ると、胸がキュンとなり感動します。

さだまさしさんの歌“風に立つライオン”の歌詞の一部“神様について、人について考えるものです”というのを実感します。

高校野球でもチーム作りに3年かかるところを、2年でどれだけ出来るか解りませんが、あと1年精一杯頑張ります。

“Ndoto yangu tutakwenda 2020 TOKYO pamoja” スワヒリ語で（私の夢は、私達が一緒に2020年東京に行くこと）

ジンバブエ・ナショナルチーム トーナメント報告

南ア・ダーバン・ホイ球場

2018年4月4日～7日

コーチ アメリコ・ジユマ

2018年のイースター・トーナメント（南ア野球大会）は4月4日から7日まで、ダーバンのホイ球場で開催されました。17名の選手、3名のコーチは4月1日、インターケープ社の豪華なバスで、ブラワヨからヨハネスブルグへ向け出発、翌朝ヨハネスブルグに到着。そこでダーバン行きのバスに乗り換え、同2日夜8時にダーバンへ到着しました。バスターミナルでローカルタクシーに乗り換え、宿泊先（ホイ球場まで車で30分のところにあるダーバン・クイーンズ・ホッケースタジアム）へ向かいました。

宿泊：大変気の利く、親切なスタッフから大歓迎されました。シングルベッド、フリーWi-Fi、湯が出るバスルーム、警備システムが備わっている3星の宿舎でした。チームはそこで3回食事をし、5泊しました。食事も美味しく、健康的なものでした。

規律：チームは規律正しく、統制がとれていました。球場の内外を問わず、ジンバブエを代表する者として、成熟した大人として振る舞いました。（アメリコ）個人的にも、選手たちの行動を本当に評価しています。

チーム・パフォーマンス：4チーム（Western province u/23、西地区 U23、Gauteng Bulls、グーテン・ブル、Mandela Bay マンデラ・ベイ、team Zimbabwe ジンバブエチーム）から成るBグループで試合が始まりました。各チームが7試合するよう総当たり戦を行いました。選手たちは全試合で先制し、良いスタートを切りましたが、最終回で相手に得点され、試合に敗れました。相手全チームとすばらしい戦いをしました。『勝っていた』試合で負けた最大

の要因は、選手たちの精神面と投手力の『弱さ』でした。この水準での大会で投げる経験を増やす必要があります。

総論：国、ジンバブエ野球協会（ZBA）を代表するこのような機会を与えて頂いたことをジンバブエ野球協会に感謝します。すばらしい時間を過ごし、経験を積むことが出来ました。さらにいつも我々を支援してくださっているブラッチャーコーチ、友人たち、日本のジンバブエ野球会の皆様、選手たちの模範となっているラブジョイ氏に、心から感謝申し上げます。ジンバブエ野球は皆様のおかげで成り立っており、頂いたご恩をどのようにお返しすればいいかわかりません。ジンバブエ野球会へは、ジンバブエでの野球活動を絶やさないようにすることだと思っています。ブラッチャーコーチのこれまでの指導に報いるには、国内のあらゆる場所で野球の試合をし、ジンバブエ野球に対する情熱を失わないことだと考えます。選手たちが現在の力を維持し、さらに上のレベルを目指すために、今年8月にプレトリアで開催される仲間内？の大会への参加を提案します。

Zimbabwe senior man National Team Tournament Results

Durban Hoy Park
4.7 April 2018

DATE	TEAMS AND RESULTS			
04/04/18	Zimbabwe	5	Vs	1 8 Western Province U/23
04/04/18	Zimbabwe	3	Vs	5 Gauteng Bulls
05/04/18	Zimbabwe	1 3	Vs	9 Mandela Bay
05/04/18	Zimbabwe	5	Vs	5 Western Province U/23
06/04/18	Zimbabwe	9	Vs	1 2 Gauteng Bulls
06/04/18	Zimbabwe	8	Vs	7 Mandela Bay
07/04/18	Zimbabwe	1 3	Vs	9 Mandela Bay

全試合は2時間半：なんとか8回まで実施できました。

4試合はホームゲーム、3試合はアウェイゲーム。

全チームが強く、7試合は選手たちにとって貴重な試合となりました。

TEAM MOTO

WITH FAITH 2020 OLYMPICS IT POSSIBLE

ブラジルでの野球ボランティア生活

日系社会青年ボランティア ブラジル野球隊員 高江直哉

今年2月よりブラジルのサルバドールにて野球指導をしております、日系社会青年ボランティアの高江直哉と申します。ここブラジルでの野球の歴史は、今年110周年を迎えるブラジル日本移民と深いつながりがあります。野球をブラジルに最初に伝えたのはアメリカですが、日本移民が多くやってくるなかで、ブラジル各地の移住地で日本移民が盛んに野球を行うようになり、野球＝日系人のスポーツというイメージが定着していきました。そのため、この国での野球の普及は日系人の手によるものがほとんどで、今でも多くの野球チームで日本語の単語を聞きます。ポジションはポルトガル語での呼び名はあるのですが、それを使わずに日本発音の英語読み（ファースト、サード、ショートなど）、牽制はケンセイ、満塁はマンレイ、グラウンド挨拶の習慣やありがとう、ごめんなどの言葉はグラウンド内ではそのまま日本語を使います。サッカー大国ブラジルでは、野球はまだマイナースポーツですが、

2013年のWBCでは日本代表と接戦したことも多少話題になり、サンパウロ州などブラジル南部では野球は認知されつつあります。しかし、まだまだ日系人のスポーツといったイメージは拭えません。

私の任地サルバドールはブラジルの東北部に位置し、かつてはブラジルの首都として栄えた歴史ある街です。ポルトガル領時代は奴隷貿易の中心地であり、今でもかつて奴隷としてアフリカから連れてこられた人々の文化が多く残っています。宗教や食文化、踊りに至るまで南部のブラジルの雰囲気とは大きく異なります。日系人の割合は非常に少なく、街でアジア人を見かけることはほとんどありません。広大な国土をもつブラジルは一つの国といえども、州や地域によって別の国であるかというほどにその人種構成や文化が異なっています。ここサルバドールで発展し、世界的に有名なものの代表格にカポエイラがあります。格闘技とダンスと音楽をミックスした独特の文化で、習い事にしている子どもも私の野球チームに何人かいます。

このような環境下のもと、野球というスポーツは地域の人々にはほとんど知られていません。野球チームは周辺の市を合わせても、私の配属先である日系人協会所属のチームしか存在しません。また、日系人の日本離れも進んでおり、日系人の野球少年は数えるほどとなっています。私はこの地で所属チームの強化、地域への野球の普及、野球の活動を通して次世代のサルバドールの日系人協会を担う日系の子どもたちの育成という役割を担っています。日々の活動は日系人のカウンターパートの方が個人で設立した球場があり、そこで行っています。平日は球場周辺に住む子どもたち（非日系）の練習を行っています。子どもたちは決して裕福な家庭ではなく、靴もなく裸足でグラウンドにくる子ども大勢います。新興国ブラジルといえども貧富の差は激しく、巨額の資産を持つ人がいる一方で学校に行く教科書さえ買えない家庭も珍しくありません。球場周辺は貧困層の方が多く住む地域で、学校に行くことさえできない子どもも練習に来ています。靴はカウンターパートの方が買い与え、グローブは私やカウンターパートの方が持ってきたものを貸し出すという形で賄っています。土曜日・日曜日は大人チームと日系の子どもと球場周辺の子どものそれぞれの練習があり、グラウンドは大変にぎやかになります。日系の子どもと球場周辺の子どものたちは現在一緒に練習していますが、私が着任する前は別々でした。ここに「日本」の「島国根性」が残っている印象を受けています。日系人のなかには自分たちを「ニホンジン」、非日系のブラジル人を「ガイジン」と呼んで区別している人もいます。野球をしている子どもの保護者のなかにも何人かはそういった考えのもと、あまり整った教育を受けていない彼らと混ぜてほしくないと思っています。ですが、子どもたちこそ、そういった隔たりなくグラウンドで同じように白球を追いかけてくれると信じて、一緒に練習を行うようにしました。また、少しでも野球に興味をもつ子どもが増えないかと、日曜日の練習後にグラウンド横の施設で日本語の授業を行っています。日本語学校が球場からかなり離れたところにあるため、最初は保護者からの要望で始めたのですが、球場の方が近くて日本語を勉強したい子どもが授業に来て、そのついでに野球にも興味をもって入部してくれないかという期待のもとに試験的に行っています。

先述の通り、周りに野球チームが存在せず、試合が一年に数回しかないため、子どもたちは実戦経験がかなり不足しています。試合の中での連携プレーや動きが全く理解できていないので、今後は実戦練習をもっと取り入れていかななくてはならないなと考えているところです。試合を観戦することによる実戦学習も難しく、いかに練習のなかで試合を想定させるかが日々の課題なのですが、一方で非日系の子どもたちは、身体能力の高い子どもたちが多く、将来期待できる選手も多くいます。

7月からは公立学校の体育の授業を使った巡回指導による普及活動も始まります。山積み

冬の集いに参加して

森 文彦

2月のジンバブエ野球会の集いに参加しました。堤氏に関しての予備知識もほとんど持ち合わせず、雪のばらつく天気でしたが、非常に刺激になる話が聞け有意義な一日となりました。余分に椅子を出すほどの盛況ぶりの中、堤氏の最初の言葉は「僕がパーを出しますから、皆さん、私とじゃんけん勝負をしましょう 負けたら・・・」でした。私を含め皆は「この人一体何をしたいのか？」というキョトンとした顔付きでした。

堤氏とアフリカとの出会いは、東北福祉大学野球部時代に偶然見たテレビ番組が発端でした。ジンバブエ野球隊員の村井洋介氏が、子供達を連れ日本に遠征している番組を見て自ら行動を起こしたそうです。それは、ジンバブエ野球会創始者伊藤益朗氏と大きな共通点があり、何か不思議な縁を感じました。堤氏は大学卒業後、野球とは関係ない社会人生活も経験されたと聞きましたが、自分自身の生き方を求め悶悶となさっていたような時期もあったようです。その後一念発起し、青年海外協力隊員（JICA）の試験に挑戦し、見事合格。そしてアフリカ（ジンバブエ、ガーナ）のみならずインドネシアにも赴任し、ナショナルチームの監督やコーチを経験。

便利で効率のいい日本とは勝手の違うことの多い国々で生活し、たくましくなって帰国、その経験を生かし野球を通じ日本の社会にメッセージを発信している姿に私は非常に感銘を受けました。語学力不足のために大きなコミュニケーションの壁にぶつかりながらも、非言語能力（眼力も含む）を駆使して、相手の懐に飛び込んだが故に相手の心の琴線に触れ、信頼関係が生まれ、堤氏はかけがえのないヒューマンネットワークを築いて来られたのではないかと推測します。

そして現在高校野球の監督に携わり、これまでの様々な異文化体験を生かし 日本の子供達に野球を通じて熱い貴重なメッセージを発信されています。堤氏の赴任後 10 余年、去年 2017 年夏、古豪名門野球高校でもない“おかやま山陽高校”は甲子園大会に初出場という快挙を成し遂げたということを知りました。私にとってそれ以上に興味をそそられたのは 堤氏の「世界に野球を普及させるために甲子園出場を目指す」というユニークな発想でした。堤氏は、甲子園出場を果たすことはあくまで使命あるいは目的のための手段、つまり、一過程であるという考え方です。更に堤氏は、甲子園出場することによって、マスコミに取りあげられる機会が増え、自分たちが”おかやま山陽高校“で何を目指しているかを全国の人々により知ってもらい野球をサッカーのように世界に普及させたい。そして究極的には野球を通じ平和に貢献できたという大きな夢を熱っぽく語る姿です。そんな堤氏の話の中味をさらに深く理解するため“おかやま山陽高校野球部”のホームページ(HP)を検索してみました。まず驚いたのは、他の高校野球部の戦績ニュースを主体にしたのとは違うHPでした。そこには、堤氏が野球を通じて高校生たちと一緒に何を求めているのかが明確に記されています。カンボジャに行って井戸掘りしたり、学校施設を建設したり、JICAの「世界の笑顔の為に」というプログラムに参加して世界の国々の恵まれぬ子供たちに道具を送ったりしてボランティア交流を“おかやま山陽高校野球部”は行っています。これらの活動はまさしくJICAでの経験が堤氏にあったからこそその産物。野球ONLYの学校から見ると「何考えてんねん。野球と何の関係もないことしても、」と一笑に付されてしまうことでしょう。好きな野球を通じて、こんな経験までできる“おかやま山陽高校”の若者は何とラッキー！と羨ましくさえ私には感じられます。こういう指導者の下で野球をする若者は、たとえ野球選手として才能が開花せずとも、将来様々な分野において尊敬に値する人物に成長していくことでしょう。まず自分たちが如何に恵まれた環境の下で野球をしているのかを肌で感じることはきつ

と野球に対する姿勢のみならず、自身の将来の生き方にもきっと大きなインパクトを与えるに違いありません。“おかやま山陽高校”は敗戦濃厚の土壇場で逆転して勝つ試合が多いという具体例をきいて、ただ“凄いな”という程度のレベルでしかそれを受け止めてなかったのですが、「66 の部訓」を読んで、なるほど、土壇場でのエネルギーがどこから湧き出てくるのか納得しました。

特に部訓 8 条に「2アウトから3連打で2点取ることに必死になれる。3人で終わることを、真剣に嫌がる。またゲームの点差に関わらず、7回からの3イニングでは、異常に盛り上がり点を取ることに執着する。」これを“おかやま山陽高校”の若者たちが実践できるようになってきたのは、部訓に日頃から真摯に向きあっているからに違いありません。部訓には野球をする若者のみならず、私達大人にとっても生きていくための座右になる素晴らしい言葉が沢山ちりばめられています。

最後に世界に野球を広めたいという堤氏の思いとジンバブエ野球会の思いが相乗効果となり、この草の根運動がもっともっと広がっていくことを期待し、“おかやま山陽高校”から日本の社会のみならず世界でも尊敬に値する若者が輩出することを大いに楽しみにしています。

事務局だより

伊藤益朗

皆様いつもジンバブエ野球会にご理解とご協力を頂きありがとうございます。

●<ホームページを一新しました> 新アドレスは <https://zykai2018.jimdo.com/>です。是非ご覧下さい。また今回のジンバブエの風 40 号は印刷代を抑えるため試験的に、カラー写真ページを印刷せず、ホームページでご覧頂くことに致しました。ご意見お聞かせ下さい。メールアドレスは次の通りです。

新しく E-mail:zykai@gmail.com 又は 従来通り zykai@hkg.odn.ne.jp

●今回のジンバブエの風 40 号は、カラー写真ページも含めて、上記ホームページにアップしておりますので、ご覧、又、お知り合いへのご紹介の程よろしくお願いいたします。

●<タンザニアツアーのお知らせ>

2018 年 10 月に、タンザニアツアーを計画しています。現在岩崎広貴氏がシニア海外ボランティアで野球指導に赴かれ、活動しておられます。この機会に一度、活動の視察と観光のツアーを考えています。現在は詳細まで決めていません。手順は以下の通りです。

- ① まずは参加をご検討される方からの申し出を受け付けたいと思います。(締切は7月4日) 連絡は、電話 06-6427-4950 又は [メール zykai@hkg.odn.jp](mailto:zykai@hkg.odn.jp) 伊藤までよろしく。
- ② その後は、申し出を頂いた方との個別連絡で詳細(日程・行程・費用等)を詰めていき、最終決定して頂きます。(それまでの途中キャンセル可です)

なお、このツアーはジンバブエ野球会が主催するのではなく、グループ旅行です。基本的に自己責任でご参加頂くこととなります。今のところ、伊藤と正岡夫妻は参加予定です。

●来る9月2日(日)の夏の集いでは、「1990年代・ジンバブエ野球創世記」と題して、村井洋介さんしか知らない当時のジンバブエを語って頂きます。詳しくは最終面ご参照を。

●前回「冬の集い」は、元ジンバブエ野球隊員でおかやま山陽高校野球部監督の堤尚彦さんにお話をして頂きました。参加者(30名)は大いに感動し、互いに素晴らしい時を共有しました。詳しくは別掲の森文彦さんの文章「冬の集いに参加して」をお読みください。

●今年春の選抜甲子園に、昨夏に続いて、元ジンバブエ隊員の堤尚彦さんが監督のおかやま山陽高校が出場されました。

●前号でご協力お願いをさせて頂きました以降も皆様の温かいご理解とご協力を頂き、今年も4月の南ア大会参加遠征を実行することが出来ました。来年予定の2020年東京オリンピック予選に向け、貴重な経験を積むことが出来ました。本当にありがとうございました。

●2017年度(2017年6月1日～2018年5月31日)の会計報告は、以下の通りです。今年度は年会費及び寄付金の収入が近年に比べ増えました。皆様のお心に感謝申し上げます。今回のジンバブエの風40号では試験的に、膨らんでいるジンバブエの風印刷代を抑えるため、カラー写真は印刷せずホームページでご覧頂くようにしてみました。

期首残高は、123,061円。期末残高は、268,416円です。

収入		支出	
前期繰越金	123,061		
年会費及寄付金	1207,744	州対抗全国大会支援	348,000
		ドリームカップ支援	150,000
		南ア大会参加支援	350,000
		世界連盟登録料(2年分)	46,879
		送金手数料(4件)	11,000
		振替用紙印字サービス	902
		封筒印刷代	6,264
		ジンバブエの風郵送料	45,632
		ジンバブエの風印刷代	91,260
		アップシューズ送料	8,740
		夏・冬の集い赤字	204
		タンザニア支援巻尺マグネットシート	3,508
収入計	1,330,805	支出計	1,062,389
		期末残高	268,416

●会計監査を河西秀和氏にお願いし、2018年6月20日に承認を頂きました。

●ジンバブエチームの東京オリンピック予選に向けた強化策への協力として、おかやま山陽高校野球部はジンバブエから今年と来年の8月に各2～3週間、選手3名(計6名)を招き、練習参加させていただきます。そして12月に堤尚彦監督はジンバブエでの代表チーム合宿に参加、指導され、来秋予定の同オリンピック予選にはコーチとして参加を予定されています。これは勇気と決断で実現する画期的なことです。乞うご期待。(ジンバブエ野球会の事業ではありません)

●今回の40号掲載の文章を書いて下さった村井さん、岩崎さん、高江さん、谷山さん、森さん、アメリカコーチ、皆さんの豊かな感受性、そして見返りがなくてもここまであらゆる形でご協力頂いている多くの皆さんの温かいお心に、力を頂き、感謝しています。

●私伊藤は25歳で野球の現役を退いた後、関学高等部監督から始まり、神戸コスモス、全播磨硬式野球団、尼崎産業高校、関学大などのコーチを経てその後もまた公立高校のコーチに通っています。よく勝つチームもありましたが、負けることが多いチームもありました。私の指導の適否やそれぞれのチームにメンバー構成や練習環境などの条件格差もありましたが、あまり勝てないチームもやっけて行く意味があります。我々はゲームの中で様々な今起きている特別な状況に直面します。たとえそれがどのように楽な或いは厳しい状況でも「君はこの状況にどう応えますか」と問われている訳です。私たちは必ず勝つことは求められていませんが、しっかり向き合うことは求められていて、好きなスポーツの中ではそれがまた誰にとっても楽しいのです。「夜と霧」で知られるV.E.フランクルの本から学んだことでした。

ジンバブエ野球会 夏の集い

「1990年代・ジンバブエ野球創世記」

お話 元青年海外協力隊
初代ジンバブエ野球隊員

村井洋介氏

ジンバブエ初代野球隊員の村井洋介さんが赴任されたのが1992年ですので、それから26年が過ぎました。開拓者としての村井さんしか知らない世界、後続の若い隊員さんとの繋がり、ジンバブエ社会や選手たちのこと…。村井さんから始まった素晴らしい物語が確かにここまで続いています。村井さんの心に残るシーンを語って頂きます。

皆様お誘い合わせの上、是非おいでください。

と き：平成30年9月2日(日) 午後1時30分受付開始

2時00分 村井洋介さんのお話

「1990年代・ジンバブエ野球創世記」

4時30分 閉会

ところ：塚口さんさんタウン2番館(2F)住宅集会室

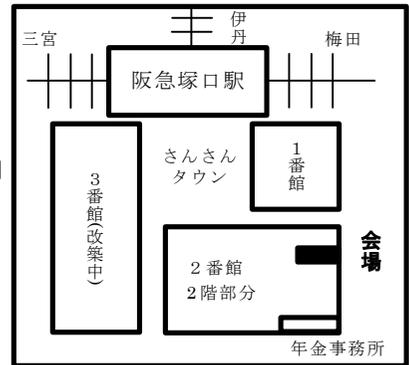
(管理事務所の隣、年金相談所の前20m)

管理事務所のTEL06-6429-5327

塚口さんさんタウン2番館は、阪急塚口駅南改札から約80m、駅前ロータリーを挟んで正面に見える14階建ビル。ビル東側にあるエレベーターか階段が便利です。

<注意> 2番館の2階ですが、もし1番館の2階から繋がっている回廊デッキから2番館ビルに入ると、そこは2番館の3階になりますので、1フロア降りて下さい。

地下駐車場(有料)は2番館東面から入って下さい。



かいひ：(お茶代・会場費等として) 500円

準備の都合上(当日参加も歓迎ですが)、8月30日迄に下記へお申し込み頂けると助かります。

事務局伊藤 〒661-0012 尼崎市南塚口町2-1-2-510 TEL06-6427-4950 zykai@gmail.com

又は zykai@hkg.odn.ne.jp

「ジンバブエ野球会」入会、継続のお願い

同会の目的：アフリカを中心に野球振興と野球交流をゆったり応援する。

活動：①年会費及び寄付から必要経費を差し引いて、元ジンバブエ在住の村井洋介さんらの意見を参考にして、目的のために役立てる。

②参加者、その他に年1~2回、ニュースレターを送り、アフリカやジンバブエのようす、会計報告、その他催しなどを知らせる。

趣旨にご賛同頂ける方は別紙郵便振替用紙でのご送金にてお申し込みください。

郵便振替口座：00930-2-126157 ジンバブエ野球会

年会費：1口 3000円

事務局：661-0012 尼崎市南塚口町2-1-2-510 伊藤益朗 TEL06-6427-4950

<https://zykai2018.jimdo.com/> E-mail:zykai@gmail.com 又は zykai@hkg.odn.ne.jp(従来通り)

ジンバブエ関連 谷山隊員（1 段目と 2 段目左）と南ア遠征（2 段目中央と右）



以下 2 枚、ブラジル関連



以下、タンザニア野球風景

